

ウィルあいち交流
ネット参加グループ

「さわらび会における男女共同参画の行方…」

私も「さわらび会」は、設立以来14年、読んだ本も170冊を越えます。会員の本の好みも多彩で、当然毎月の例会の課題本もバラエティーに富んでいます。

長年女性会員ばかりだったので、男性がこの本を読んでどんな感じ方をするのかということが大きき取り上げることないのは、不思議と言えば不思議なことです。どんな小説もエッセイも、登場人物が抱え込んだ人生、社会問題、男女問題をテーマにしている以上、本を読むことを通じて一緒に経験して来たはずですから。

『夫の始末』を取り上げたのは2回目で、著者田中澄江の夫は有名な劇作家の田中千禾夫氏です。お嬢さん育ちの女性作家を妻にした同業の夫もなかなかですが、大変な夫婦関係でした。『幻の塔』のハウスキーパー熊沢光子が男性党員の犠牲になった哀れさは、山下智恵子氏が書かねば、その存在も世に知られなかったと思います。

『好太郎と節子』（澤地久枝 著）や『智恵子飛ぶ』（津村節子 著）を読めば、芸術家夫婦で犠牲になったのはやはり女性だったようですが、幸いというのか、三岸節子は夫より長生きしたお陰で、その芸術家人生に絢爛たる花を咲かせました。

『鷗外の坂』は文豪の家庭での恐妻家ぶりや家庭問題、また娘たちへの溺愛ぶりを露わにしていますが、著者の森まゆみ自身は離婚して子供3人を育てながら地域雑誌「谷根千」を長年発行し続けた偉い女性です。最近宮本百合子、与謝野晶子、林芙美子の乗ったシベリア鉄道を追体験しながら、三人の作家人生を彫琢する旅行記を著しました。

田辺聖子著『花衣ぬぐやまつわる…』は、夫婦関係や男性優位社会・文壇の軋轢で犠牲になり狂った俳人・杉田久女の句の数々を顕彰し、その魂を悼む女性作家ならではの渾身の作でした。女の陰に男あり、その陰にまた女（の偉業も）あり、でしょうか。

さわらび会は、ずっと女性同士でどちらかと言えば女性作家の書いたものを読むことが多かったのですが、最近入会した唯一の男性会員の意見も参考にしながら、読書会の幅を広げ、男女共同参画活動の趣旨をも実践していきたいものです。

★代表／多田昭子 (Tel & Fax 0568-79-5616)

例会：第4水曜日10:00～会議室2

- *さわらび会
- *メンズリブ名古屋
- *ア・コール
- *女性学'98の会
- *IPA
- *メディアの会かたつむり
- *ウィル10
- *A・B・C・Net
- *C・C・C
- *グループ・キートス
- *クラリネット'99
- *2000女性学の会
- *ウィル2000
- *I. W. L
- *ウィル・ミニ・ボックス
- *めだかっこ
- *ウィルLove
- *ウィルDo2002
- *平成いちご会
- *きらら2005
- *サーティネット '05
- *ベリーズ18
- *Step07
- *トライアングル '08
- *まちづくりファシリテーター勉強会
- *Fem.'09
- *Amelie' 10

ウィルあいち交流ネットとは…

ウィルあいちセミナー等の受講修了生による自主活動グループで組織された団体です。

満天の星の下 タキーレ島で日本を考える



南米アンデス山中にチチカカ湖はある。琵琶湖のざっと 10 倍の広さを持ち、水面の標高は 3,812m（富士山の山頂より高い）だそうだ。2009 年、夫婦で中南米を放浪する機会があり、ペルー領内のチチカカ湖に浮かぶタキーレ島に 2 泊した。2000 人ほどの住民が暮らす、自給自足、物々交換が基本の別世界だった。車はもちろん、自転車も走っていない。人が歩くだけの道しかない。電力も水道もないから、冷蔵庫や洗濯機の便利な家電製品もここへは運び込む必要がない。

住民による伝統的な自治組織（共同体）がこの島には残っていて、任期 1 年間のアウトリダーデス（評議員）21 人によって、すべては仕切られている。それは観光客の受け入れから行政、司法まで多岐にわたっていて、あらゆる場面で「平等」の原則が徹底されている。

島北部の船着場から、急な階段道を登り広場のある集落へ。迎えに来た青年に案内されて 2 時間ほど山道を歩いた。宿泊先に指定された農家は島の南端近くにあった。翌日の午前 4 時ごろトイレに起きて外に出たら洗濯物を抱えて湖岸から上がってきた少女ユリに会った。まだ暗い早朝の洗濯は小学生である彼女の役割だ。台所の燃料は LP ガスだったが、気圧が低いのでなかなか沸騰しない。調理にも時間がかかる。民宿といえども、日本なら決まった時間に食事は出そうだが、ここではゆっくりだ。時間の流れる速さが違う。

日が沈むと辺りはもう真っ暗、テレビもないし、夜空を見上げる。訪れたのが 6 月で、乾季だったのから雲ひとつない。「南十字星はどれかな」と探しながら、満天の星を楽しんだ。

毎日の水汲み、炊事や洗濯、羊や牛の世話、農作業に追われる住民たちを見ながら考えた。新車が出るたびに買い替え、グルメ本を見ながら高級飲食店を食べ歩く日本の富裕層と、この島の人たちとどちらが幸福なのだろうか。島では物々交換が基本で、冷蔵庫もないから必要以上に魚も捕獲しない。ただ子どもに教育を受けさせるには現金が必要だ。衣食住のあらゆる面で伝統文化を大切にするタキーレの人たちだから、「鎖国」も可能だったろう。先進国からの観光客を受け入れた理由は、「伝統社会を維持していくには頭脳も大切。街の高校、大学に子どもを通わせるためには現金が必要」という認識からではなかったろうか。自らの選択で物質文明に（完全には）染まらない、こんな島が残っていたのがうれしかった。

（メンズリブ名古屋 鈴木善太郎）

[編集後記]

さわやかな季節を迎え、あいち国際女性映画祭も無事終了することができました。これも皆さんのご協力なくしては出来ませんでした。本当にありがとうございました。

S. I

編集発行：ウィルあいち交流ネット

編集協力：(財)あいち男女共同参画財団

企画協働課協働担当

電話 052-962-2512 FAX 052-962-2477

<http://www.will.pref.aichi.jp/>